青森中央短期大学　研究紀要 第31号（2018年）抜刷

保育内容・人間関係と幼児教育
―保育環境と教育相談を絡めて―

Childcare Contents (Human Relations) and Early Childhood Education
～ Including Childcare Environment and Education Consultation ～

大　橋　　誠

[研究ノート]

保育内容・人間関係と幼児教育

―保育環境と教育相談を絡めて―

Childcare Contents (Human Relations) and Early Childhood Education ～ Including Childcare Environment and Education Consultation ～

大橋　誠
Makoto OHASHI

青森中央短期大学幼児保育学科
Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

Key words；保育内容、人間関係（母親、子ども、友達）、保育士・幼稚園教諭

Ⅰ　はじめに

保育士・幼稚園教諭養成教育課程の中に「保育内容・人間関係」がある。これは保育内容5領域の中の一つに加えられ、保育士・幼稚園教諭が学ぶべき重要な領域である。この授業では子どもが生まれてから幼児教育が終了するまでの子どもの育ちについて多方面から見ることで概略を知ることが求められる。また、子どもを育てるために、周りの大人 (保護者 (母親)、保育士・幼稚園教諭) はどのようなことを心がけ、どのようにこどもを育てるのかについて考えを深める。さらに小学生を長く見てきた経験を加え考えてみたい。

小学１年生の夏休み前までは大きな学力差は見られないが、その後徐々に差が目立ち始め３年生ぐらいになると学力の差が大きくなりがちである。1年生の勉強は担任の教師と周りの友達とともに基本的なことを学び、学んだことを個々が身につけていくことが大事になる。そのために特に子どもに求められることは、クラスの子どもたちや担任の先生とコミュニケーションをとることである。すなわち人間関係が良好に保たれていることが求められる。授業を受けながら考えたり、ノートに書いたり、先生の指示を聞いたり、グループの友達と確認を取り合ったりとコミュニケーション能力が必要になる。頭を絶えず回転させ、いろいろ考えることが大事になる。間違えたり、おかしいことを言ってしまったりすることは何でもないことで、間違えたら修正しながら学んでいくことで理解を深めていくのである。そのため、小学校入学の前に一人ひとりの子どもが身につけておくことは、たくさんの友達とかかわりを持ちながら活動することと先生や友達の話をきちんと聞けるように人間関係を築いていけることが求められる。

さて園での子どもたちのあそびの様子を見ると、笑顔を見せて嬉々として走り回っている。上り

棒や鉄棒、縄跳び、一輪車、跳び箱、かけっこなど、子どもたちは運動能力を高めようとはほとんど意識しないで一生懸命遊び、知らず知らずのうちに体力をつけ、運動能力を高めている。学齢に達する前の子どもたちには、安全な環境の中、楽しい雰囲気でたくさんあそばせてほしいと願っている。園の運動環境を整えることで、その中で生活する子どもたちが体を動かす喜びを感じながら走り回ったり、縄跳びや跳び箱に自ら挑戦し達成する喜びをたくさん経験することが求められる。

小学1年生が心身ともに健康に育つためには、成育歴の過程で、それぞれの時点の必要なことがらを手ぬかりなくやっていく必要がある。幼児教育に入るまでは父親、母親が中心となり家族の支えが必要である。この支えは子どもが自立するまで続けることが本来の子育てであろう。現在では1歳未満の生後間もない子どもを保育園に入園させることも多くなり、一部の親は入れるのが当たり前と考えている感じさえする。とはいえ両親ともに働くことを余儀なくされている家庭も多く預けざるを得ないのである。しかし子どもを園に預けたからと言っても、親と子の人間関係を保ち、子どもをきちんと養育することは親の大きな努めであることを忘れてはならない。このことを自覚したうえで、子どもの生活の様子について保育士と連絡を取り合い協力しながら子どもの行動を理解しながら養育することが求められる。両親が忙しく、子どもの子育てに時間が取れないからといって、園や保育士に養育を任せてしまうことがないように、しなければならない。また親の中には、入園できる月齢になったり、授乳期を離れ離乳食を食べられるようになったりすると、もう大丈夫と言わんばかりに子どもを入園させる例もある。勤務先の事情や経済的な思惑で動かざるを得ないこともあるため、こういうことは一概に間違いとは言い切れないが、養育のほとんどを保育園に任せてしまうことは、その子にとって決して幸せなことではないことを理解する必要がある。

Ⅱ　保育士・幼稚園教諭が「人間教育」で学ぶこと

近代の産業・科学の進歩は人間生活を便利で快適なものにした。社会・経済構造も変化し、個人の幸せを追求する生き方や価値観や生活スタイルが一般化した。自然破壊や環境汚染、地域社会の解体、核家族社会は人間関係の希薄化を招き、伝統的な社会システムや文化を衰退させた。また個々の人間関係や家族の存在を孤立化させ、子どもが育つための必要な地域や家庭の持つ教育力の低下を招いた。(寺見陽子－保育出版社)

現代の子どもたちには、テレビ、ビデオ、ゲーム、パソコン、玩具などが生まれたときから身の回りにあることが一般的である。核家族、欠損家庭の増加や共働き家庭の増加により、時間外保育や休日保育を利用する家庭も増加している。その結果家庭での親子のかかわりを持つ時間が減少している現状がある。また少子化による過保護及び過干渉の問題も議論されるようになっている。

これからも私たちは益々個人の幸せを追求する生き方をするようになり、パソコンを使い、仕事や作業を簡略化し、余暇を追求するようになるのであろう。しかし一方で子どもたちの育ちはどうなるのであろうか。基本にあるのは親と子の人間関係がしっかり結ばれていることが必要不可欠である。こういう時だからこそ「保育内容・人間関係」の内容を私たちがしっかり学び共有しなければならない。

Ⅲ　保護者の子育てと子どもの育ち　０歳児～２歳児

子どもの養育は親の大切な役目だが、考え違いも多い。授乳期の最中にもかかわらず、子どもの

育ちのために教育玩具を与えたり、離乳期になると子どもの育ちに過度の期待を寄せ絵本を読み聞かせたり、音楽を聞かせたりと過大の期待を寄せている場合もある。子どもの発達過程に関係なく多くを与えるとかえって逆効果になることも保護者は知っていなければならない。ここに一つのデータがあるので紹介する。「8 ～ 16か月児について早期教育のためのＤＶＤ / ビデオの視聴によって言語の発達の遅れが生じた(2 ～ 24か月児1,008名対象グループの調査）(ワシントン大学研究グループ)。」子どもの言語能力は一方的に聞くだけでは発達しないことを認識すべきである。テレビの健康影響について多くの親は視力への影響を心配しているが、言語発達への影響を心配している親は少なく、むしろ言葉や知識を教えるために見せている親もいた。しかし、「乳幼児の言語能力は、大人との双方向のかかわりの中で発達する (中略) 実体験を通して言葉を理解すること、子どもにわかりやすく話しかけ、子どもの話をゆっくり聞いて応えることが大切である。(2004年日本小児科学会)」

テレビやビデオ・DVD を見せることで、子どもの知的能力が高まるとか、言語能力が高まったりするとの考えで、母親が家事で忙しいとかおしゃべりに夢中で手を離せない状況にあるからと、そんな時はこれがあるから大丈夫というように、テレビやビデオ・DVD を便利なものだと思い込んで利用しているのは大きな間違いと言える。子育てに携わる人は、親にかかわらず保育者もそのほかすべての人がかみしめてみるべきである。

また子育てに関連して子どもと母親が愛着関係を築くことが非常に大事になる。乳幼児期の子どもに大切なことは、安心できる安全で清潔な環境の中で子どもと親がいつでもそばに寄れる位置を維持して過ごすことが望まれる。子どもが「はいはい」できる頃にかかわりを持とうと考えていては手遅れになる。乳児期のころから子どもは絶えず泣いたり、手を動かしたり、むずかったりと気付いてほしいと母親に無言のサインを発信している。このサインをきちんと受け止めるか見逃したり聞き逃したりしているのとでは大違いで、子どものサインを受け止めないことが重なると子どもの成長に悪影響を与えることになることを母親・父親、家族がよく知っていなければならない。「愛着を形成できるとその後順調に生育するが､愛着の形成に失敗するとその後の成長過程で引きこもりになったり、感情が乏しい子になったりすることが明らかになっている。（ワーターズ－1979年）」このことはエリクソンも乳・幼児期における発達課題として「基本的信頼　対　不信」､「自立　対　恥・疑惑」､「自主性　対　罪悪感」と対比させて示している。

ここで問題となっていることがある。それは以前、母親が子育てをそれほど難しいものと感じないで、子どもの成長に合わせて子どもとかかわっていたものだが、最近母親が子育てを難しいと思う場合も多くなっていることがわかってきた。これは母親が育った環境が少子化の影響で兄弟姉妹が少ないとか一人っ子だったということと関係がある。子どもが自分一人だったということを考えると自分が親に育ててもらったことは事実であるが、兄弟がいないと自分が子どものとき周りの兄弟とかかわった経験がないことがわかる。このことは自分がどのようにかかわってもらったのかについて何も知らないことになる。例えばかわいがられて、何でも手に入り、恵まれた子ども時代を過ごしたことしか心に残っていないということになりかねないのである。

Ⅳ　保育者の関わりと子どもの育ち（３歳児～５歳児）

家庭とのかかわりのなかで暮らしていた生活が、入園と同時に一変する。見知らぬ保育者や集団

の中での生活が始まる。これまでのように自分の思いだけでふるまうわけにはいかない。仲間と一緒にどのように生活していくのかを学んでいかなければならない。領域「人間関係」では「幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう」という個の育ちとともに、「身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感を持つ」という共同性の育ちを目指している。時間をかけ子どもたちの育ちを見守り、援助することが重要である。(幼稚園教育要領解説)

子どもは保育者との信頼関係が形成されることによって園での生活が安定し保育者とかかわりながら楽しみ、友達とも安定したかかわりを持つことができる。始めのうちは園の中で友達と一緒にいるが、同じ場所を共有するだけでそれぞれの子どもが友達とかかわらず一人で遊んでいるが、その場に安心して一緒にいるということがこれからの人間関係につながっていく。この状態を確認できたら子どもと子どもを関係づけるのは保育者の役割になる。子どもの言葉や表情、遊びの内容を見守り子どもの心の内面を理解することが大切になる。そして頃合いを見てタイミングよく周囲の子どもとのかかわりを援助していく。保育者が子どもの気持ちを代弁し、子ども同士をつなげていく役割を果たすことも大切になる。子どもは自分のやりたいことに先生が気づいて認めてくれるという安心感が持てれば次々に興味を広げ遊びを発展させていく。(鈴木えり子)

しかし順調に育つばかりでない。時に子どもの気持ちと気持ちがぶつかり合い、けんかになることがあるが、保育者はあわてずそれぞれの子どもの思いを聞いておさめていく必要がある。子どもはけんかを通して自分の思いだけでは相手とぶつかることがあると分かり、「折り合いをつける」ことを学び、園での生活や遊び方を覚え、社会の規範や文化を学んでいく。さらにけんかやいざこざを起こすことで、いろいろな葛藤場面を経験することにもなる。自分一人の思いだけでは解決しない、相手の気持ちも考える必要があることに思い当たることで、解決の糸口が見つかることもある。またこのような経験が自己主張だけでなく、問題解決能力や自己を抑制する忍耐力を育て、考えてから行動するというような自己を統制する力を身につけていく。このようにさまざまな障害を乗り越えて育つことも子どもにとって必要なことである。

V　保育者に関すること

保育者は多くのことに対応することが求められる。一例として年少組の保育園児はおもしろそうだと興味を感じたことやできないことをできるようになりたいという意識が非常に強いので、この時期を逃さずに子どもの意欲をそがないようにできるだけ多くの体験をさせたい。例えば年長の子は安定した歩行ができるが、一緒にいる年少児はうまく歩けない。そういう時はいつでもうまくなろうとする意欲が強く一生懸命に歩き続ける。このことはその後起こる様々な事柄に対応するための第一歩となる。ある程度歩けるようになると続いて少し難しいことにも挑戦していく。土手みたいな斜面になっているところを年長児が楽しそうに上り下りしているのを見ると年少児は自分でもできると思って斜面に行ってみるがうまく歩けない。体をどのように使ってバランスをとるのかよくわからないのである。なかなか斜面にしっかり立つことができない。しかし年少児はうまく歩けないからといってあきらめることはない。立てるようになって歩こうとするとバランスを崩して転ぶことが数限りなく起こる。次の日も次の日も挑戦することで最後にはバランスを取りながら土手の斜面を下りたり登ったりできるようになっている。子どもの心を汲めない大人は何をしているんだ、もう家に帰るぞ。と

いう風に考えがちで子どもの挑戦を理解できない場合もある。年少児は同じことを繰り返すし、できるようになることが喜びに変わるため、この時期には無理に強制することはいけないが、子どもが興味を示してやろうとしていることはどんどんやらせることが大切である。この時安全に配慮することはもちろんである。保育者は子どもの気持ちを汲み取りできるだけ子どもに寄り添いながら声掛けをし、粘り強く見てあげることが大切である。

保育園や幼稚園では家庭でできないことが経験できる環境である。家庭ではある程度わがままがきき、思い通りに行動できる。また、話すことを母親や父親がそばで聞いてくれる。話すことが拙くても、親は様々なことを推し量りながら話そうとしていることを理解しようと努めてくれることが多い。しかし園での集団生活では、あそぶものが違うことが多く家庭と同じようにあそんだり、周りの子に聞こえるように話したり、話しがある程度できたとしても伝えようとしたことが相手にうまく理解されなかったりしてコミュニケーションがうまく取れないことも起こりがちである。そういう場面に遭遇すると、子どもは葛藤し、さまざま考え、ストレスを抱えながらの園生活になる。また家庭ではわがままを許されていたのが、集団の中では様々なルールがあり、それがわからないと、周りの人から注意されたり、あそびから外されたりすることも出てくる。このようなことが日々続く中で経験を重ねていく。これらの集団生活で数えきれない実体験を経ることが子どもの成長に様々働きかけ、徐々に集団になじみ、仲良くあそぶことができるようになっていく。園で友達や先生とコミュニケーションが取れ楽しくあそべるようになると毎日の生活が充実したものになる。そのことで友達とのかかわりに自信を持てるようになり、友達とさらに理解しあい、いろいろな感動を共有できるようになる。このような子どもの育ちの経緯を保育者は知らなければならない。

Ⅵ　保護者に関すること

価値観が多様化し、子どもを持つことは、個人の選択にゆだねられることになり、(中略)子育ての仕方や子どもとのかかわりや遊び方がわからない、子育てに不安を感じる保護者が増えた。(寺見陽子)そのような不安を感じる保護者に対しては「地域子育て支援拠点事業」があり、これは核家族などが増え、子育ての悩みで孤立する家庭に地域全体で総合的に支援の手を差しのべていこうとするもので、子育て困難状況にある家族への具体的な活動としては、育児相談や育児援助、自由な参加型の子育てサークルなどを行う。また支援の担い手となるボランティアの育成や紹介なども進めている。(中略)乳児院や母子生活支援施設、NPO 団体などと十分に連絡を取り、自助・互助・共助・公助の連携支援で、困難な問題を抱え孤立する家族の自立を促す。(塩川寿平)

最近の保護者は子育てやしつけ面で、それまでの保護者と同じと考えていると、面食らうことも多い。それは保護者の両親の子育て自体が核家族化や少子化といった社会環境の中にあり、両親が共働きのことも多く子どもと一緒に語ったり、しつけをしたりといったことがおろそかになっていたことが影響している。そのため、子どもが成長し親になったときに親がやってくれたことが記憶に残らず、子育てに関する親から子へのつながりが切れてしまっているため、子育てするという意識に自信が持てない場合が多くみられる。

このような場合、保護者特に母親は子育てで悩むことが多いので、保育園・幼稚園の場でいつでも気軽に話せる場があると精神的にも安定してくる。子どもが入園すると、いろいろ相談する場があ

ることに気が付けるが、入園前の子を持つ親の中には悩みをどこで相談するのかわからず心を痛めている場合もある。この場合は「子育て支援事業」があり「乳幼児及びその保護者が相互の交流を行う場所を開設し、子育てについての相談、情報の提供、助言その他の援助を行う」（児童福祉法）　というものである。

背景には3歳未満児の約7 ～ 8割が家庭保育であること、核家族化による地域のつながりの希薄化、児童数の減少などが挙げられ、子育ての孤立化、子育ての不安感と負担感の増大、大人と子どものかかわりの減少などの社会問題がある。(中略) 子育て中の当事者による支え合いにより、地域の子育ての力の充実を目指している。(塩川寿平）子育てがうまくいかないときや家族に協力を得られないときなどは悩みを一人で抱えずに、相談機関に相談することを解決策の一つとして心に留めておきたい。

Ⅶ　おわりに

これまでも多くの保育士、幼稚園教諭養成課程の学生が保育内容「人間関係」を学習している。学生たちが幼児保育を学ぶきっかけになっているのは「自分が教えてもらった保育園の先生にあこがれて」、「あの先生のようになりたい」との思いからで、人数も多く数える。保育内容「人間関係」は学生たちが乳幼児の成長の過程を考える上で一つの指針になってほしいと思っている。「人間関係」は「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う」ことを学ぶ領域である。園でしっかり養育され、卒園した後、ひとりひとりが自分の思いを表現し、小学校で楽しくあそんだり学んだりできるようになって欲しい。これからも園児が自己の能力を伸ばしていくために、保育内容「人間関係」でやっておくべきことはないのかを考えていきたいと思う。

参考文献

保育内容人間関係　小田豊・奥野正義　北大路書房　2014年
子どもの心の育ちと人間関係　寺見陽子　保育出版社　2010年
領域人間関係　田宮縁　萌文書林　2013年
保育所保育指針ハンドブック　学研　2008年
幼稚園教育要領解説　文部科学省　平成20年
保育用語辞典　谷田貝公昭　一藝社　2016年